
「先輩、あのね。～tearlove～」

R i n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「先輩、あのね。」tearlove「

【NZコード】

N4291Z

【作者名】

Rin

【あらすじ】

「この恋は絶対に叶わない・・・」

彼女がいる先輩を好きになってしまった美香。

好きなのに近づけない。。。、

好きなのに、想いを伝えられない。。。

そんな切なく苦しい恋をする美香の想いに、

美香のクラスメイト・匠が気づき・・・。

彼女がいる先輩を想う美香。

美香に好きな相手がいても、守ろうとする匠・・・。

4人の複雑な恋が、時には離れ、時には絡み合つ・・・。

叶わない恋

（第1話）

先輩、あのね。

好きです、大好きです。

先輩は明るくて、氣もくで、こんな私にも優しくしてくれて。

先輩を見てるだけで、胸がきゅ～りとじめつけられて、ドキドキするんです。

…だけど、私がいくら先輩を想つても、この恋が叶うことはないんですね。

誰よりも、先輩のことが好きなのに…。

私の初恋は、絶対に叶うことのない、つらい恋なんだ…。

*

ピ―――！

「試合終了ー！」

試合終了の笛が鳴ったと同時に、体育館に歓声が響きわたった。

「やつたー！」

私も嬉しくて、思わず、立ち上がってしまった。

「ナイス、皇！」

「最高！」

「皆のおかげだつて！」

コートの中で、皆に囲まれてるのは、長谷川皇先輩。同じ高校の2年生。

バスケ部のエースで、明るくて、気さくで、皆に人気がある。

…そして、私の好きな人。

「皇つ、お疲れ様！」

走りながらコートの中に入つてくる、女人の人。

「夏希！」

先輩とその人が、ハイタッチしてゐる。私はそれを、悲しそうに笑いながら見つめていた。

私、桜木美香、高校1年生は、皇先輩に恋をしている。

先輩は、私の初恋なんだ。

…だけど、先輩には彼女がいる。

その彼女は、今、皇先輩と楽しそうに話してゐる、篠原夏希先輩。

夏希先輩は、皇先輩と同じ2年生で、生徒会の副会長さん。

美人で頭よくて、気取らなくて…、誰にでも優しい、皆の、憧れの先輩…。

「いいなあ…、夏希先輩は。」

私は、きゅうりゅうとしめつけられる胸をおさえながら、そう呟いた。

…私と先輩が、初めて会ったのは、雨の日だった。

その日私は、受験会場に行く途中で、でも口ケテ怪我して、傘も壊れちゃって…。

道端にうずくまついた。

「（えりうじゅう、）のまおじゅう…」

その時、

「君、大丈夫？」

…困つてた私に、一番に声をかけてくれたのが、先輩だった。

「あ…、ちよひと「けちゃって」、「やつなの?あつ、もしかして君、受験生?」

「あ、はい。」

「そこ」の東高校?」

「そうです。」

先輩は時計を見ると、私の顔をジッと見つめた。

「…少しだけ、我慢してて。」

小さな声で、そう呟いた先輩は、私を抱きかかえた。

「え…。」

「すぐ着くからー。」

そう言って先輩は、私を東高校まで送つてくれた。

…ねえ、知ってる？先輩。

私にはその時、先輩がすっごく、キラキラして見えたの。

皆通りすぎてくれで、先輩だけが声をかけてくれた。

後から知つたけど、その日先輩には大事な試合があつて、先輩も遅刻しそうだったのに、私だけが消毒までしてくれた。

優しくて、キラキラしてて…。

そんな先輩に恋をした。

なのに、彼女がいるなんて、知らなかつたよ。

あんなにキレイな彼女さんに、私勝てないよ。

…もう、好きになつちゃつたのに…。

だけどやつぱり、先輩のこと諦められなくて、先輩が入ってるバス
ケ部のマネージャーになった。

先輩は私のことを、ただのマネージャーとしか、見てない。

そんなことわかつてゐる。

…だけど、そばにいたい。

先輩に、見てもらえなくとも、好きになつてもらえなくともいい。

ただ、そばにいたいだけなんだよ…。

大粒の涙

（第2話）

キーンゴーンカーンゴーン…。

「美香、次、教室移動だよ！」

「あ、うん！」

3時限目の終わり。

私は教科書をそろえ、友達と一緒に教室を出た。

廊下を歩いていると、

「あっ、ねえ美香！」

「なに？」

「ほら、そこ！」

友達が、窓の外を指さしている。そこには…、

「ほら、匠くん（　〃　〃　）」

木にもたれかかって読書をしている、伊藤匠くんがいた。

匠くんは、私のクラスメイト。だけど、しゃべったことないや。クールで、授業出ないのに頭よくて、先生たちもなにも言えない感じの人。

けつこう、女子からは人気らしいんだけど…。

「匠くんさー、かつこいよねー（　〃　〃　）」

「そうかなー？」

「えー。美香、匠くんのこと、かつこいいと思わないの？」

「んー。別に……。」

確かに匠くんは、人を寄せつけない独特の雰囲気を持つてる。
女子からクッキーとか、絶対にもらわないんだろうな(○_○)

気づかれた恋心

（第3話）

ダン、ダン、ダン！

「皇、バス！」

「入れる皇！」

「おっしゃーー！」

次の瞬間、先輩がふわりと宙に飛び上がり、ダンクショートを決めた。

「わあ……！先輩すごい！」

私はバスケットボールを磨いていた手を止め、つい先輩に見つてしまつた。

「（本当に）、キラキラしててかっこいいなあ……。）

私がバスケ部のマネージャーになつて、3ヶ月。

先輩がバスケ部に入つてゐるつてわかつて、どうしてもマネージャーになりたくて、友達と一緒に頼みにいつてもらつたんだつけ。

入つたばかりの時はちょっと不安だつたけど、やっぱり入つてよかつたな……。

部活は、私が先輩を見つめてられる唯一の時間。

他は、ずっと夏希先輩と一緒にいるから……。

その時、

「おーい、桜木！」

「（えつー？）」

私がバツと顔を上げると、そこには皇先輩と夏希先輩が……。

「ど、どうしたんですか？」

「なんかね、皇がさつきショートした時、ひざがぶつけられたみたいで……。」

夏希先輩が、少し呆れぎみに言った。

「桜木さん、手当をしてあげてくれる？ 私、ちょっと今、手が離せなくて。」

「あ、はい！」

鼓動がはやくなりだした。

私にとつては、願つたり叶つたりだし！

「い、今手当しますねー！」

私は、消毒液を握る手が、震えてることに気づいた。でも怖い震えじゃなくて、緊張の震え……。

私は、深呼吸をし、落ち着かせてから、消毒液をふくんだティッシュを、先輩のひざに当てた。

「うわ、しひれるー。」

「い、痛くないですか？」

「平気だよ！」

「あ、はい！」

ひざに当っていたティッシュを、もう一度ひざにギュウッと押しつけ、

離した。

「今ばんそうこう貼ります！」

と、勢いよく立ち上がった瞬間、床のティッシュに足をすべらせ、私は後ろ向きに倒れた。

「つわつ！」

「！！桜木、危ない！」

どっしーん！という派手な音に、体育館にいる全員が振り向いた。私は、転んだのに痛くないことに、頭に？マークを浮かべていた。が、後ろを見ると、そこには痛そうに顔をしかめている先輩が…。
「せ、先輩！すみません！」
ようによつて先輩にけがさせちゃうなんて…！
私の顔が真つ青になつた。

「大丈夫ですか？」

私が先輩の腕を掴もうとすると、先輩がいきなり立ち上がった。そして、私にニカツとした笑顔を見せた。

「オレは大丈夫！頑丈なんだよ！てかそれより、桜木大丈夫か？どこか痛いとこない？」

ドキン…。

先輩、自分もけがしてるのに、真つ先に私の心配してくれるなんて…。

「…先輩は、優しすぎます。」

「…え？」

言い終わつてから私は、ハツとした。

「せ、先輩のこと、嫌いじゃないです……。ただ、うまく話しかけられなくて……。」

私はバツと頭を下げる。

私は必死に先輩に伝えた。

「……も、嫌いじゃないです。」「え……？」

誤解ときたいよ……！

「うしょり……、

……私、そんな風に思われてたんだ……。

「だからさ、嫌われてるのかなって。」

恥ずかしかったから
なんですが……。

「だつて桜木、いつもオレと田があつと、顔そりすだり？」「そ、それは……。」

「いやオレも、ずっと桜木に、なんか……、恐がられてる？つーか嫌われてんのかなって……。」

「え！？何ですか！？」

「……すげー、びっくりした。」「え……？」

私が顔を上げると、先輩が、照れたよつな、嬉しそうな顔をしていた。
「あ、あの……。」「え……？」

「……すげー、びっくりした。」「え……？」

「うしょり、いきなりこんなこと言つて変だと思われないかな……。」

「誤解させてしまったなら、『じめんなさい…』

しばらくの沈黙が続いた。

先輩、引いちゃつたのかな…。

でも、誤解されるよりはいい…。

とその時、私の頭に、温もりがある先輩の手がおかれた。優しくてあたたかい手…。

「ありがと、桜木。」

「先輩…？」

「桜木の気持ち、ちゃんと伝わった。ありがとな…！」

「っはい…！」

先輩、大好きです。

あなたのその、優しくて、輝いた笑顔は、皆を幸せにする。

：私、先輩を好きになつて
本当によかつた…。

「ヤバい！遅くなっちゃつた！」私は部活の成績表を持ち、教室へ戻ってきた。

窓の外はもう真っ暗で、風がヒューヒューと音を立てていた。

「早く帰んなわやー。」

カバンを取り、帰る支度をしていたその時、

「ちゅうと待てよ。」

え…？

私がゆつべつと教室のドアを開けると…、

「た、匠くん…。」

「ちゅうと話があるんだけど。」

私に話…？

私、何かしたっけ…。

「あの、なんの用で…。」

「あんた、2年の長谷川皇のこと好きだろ?。」

「…え…？」

いきなり匠くんの口から飛び出した衝撃的な言葉。

私はその場から動けなかった。

窓の外では、一段と風が「ウウウウ」とうなりをあげていた…。

（第4話）

「あんた、2年の長谷川のこと好きだら？」

「匠くんの言葉と視線に、私は足が動かなかつた。

そしてやつと言葉を絞りだし…。「なんのことですか？別に好きじゃないです。」

「ウソ。…やつを見てたんだぞ。体育館であんたと長谷川が話しているとこ。」

「あへつと、私はまばたきを何回かした。

「だつて私、マネージャーですから。マネージャーと部員が話してちゃおかしいですか？」

「…長谷川はあんたのこと、ただのマネージャーとしか見てないだらうけど。あんたは長谷川をただの部員としてじやなく、特別だと思つてゐる。」

「なんでもんなこと…。」

「見つやわかるよ。だつてあんた、長谷川と話すとき、めつちや嬉しそうな顔してるし。」

「なつ…、」

言葉とは反対に、私の頬はどんどん紅色に染まつてこつた。

「ほり、やつぱり。」

「つ……どうするんですか。バラすんですか？それとも……、お、
脅すんですか？」

私が言つと、匠くんがかすかに笑つた。

「バラしも脅しもしないよ。……ただ、協力してあげようかつて。」

「……はい？」

予想もしてなかつた言葉に、私は啞然とした。
協力？ なんで匠くんが！？

「え、なんで……。」

「そんなに警戒しないで。ただ単純に協力したいだけだから。」「
だけど、喋つたこともないのに……。協力する理由が無いじゃない
ですか。」

「……ま、理由なんかどうでもいいじゃん。あんたは協力してもらつ
たら結果的にプラスなんだから。じゃあね。」

「あ、ちょっと……！」

匠くんは、一度ニヤリと、不適な笑みを浮かべ、教室から出ていつ
た。

「な、意味わかんない……。」

私は自分の机の脇に、ペターンと座りこんでいた……。

ソーッ……

「（よし、匠くん、まだ来てない……。）」

私は教室のドアの脇から、中を覗きこんだ。まだ、匠くんの姿はな

く、教室はいつものように、賑やかだった。

「ふー、よかつた。そ、行こ！」と、私が教室に入ろうとしたその時、

「おはよ。」

私の肩をポンと、匠くんがたたいた。

「た、匠くん…。」

「なにやつてんの？」

何、このあやしい笑顔…。

絶対になんか企んでるよ…。

「おはよ。なにか用ですか？」「ん…、別になんでもないけど。てかさ、その堅苦しい敬語やめろよ。クラスメイトなんだし。」

「…わかった。」

「…と匠くんが、「いい子。」と優しそうに笑った。

この人、こんな顔もするんだ…。なんか、クールなイメージしかなかつたから意外…。

「ほら、教室行くぞ。」

「あ、あ、うん…。」

ガラガラガラ…!といつ、かなりの大きなドアを開ける音に、教室が静まった。

「なんで匠くんと桜木さんが?」「変な組み合せ…。」

ヒソヒソと女子たちがささやきあつていてる。

「ハーフ空氣、苦手だな…。」

私が少しオドオドしていると、それに気付いたのか、私の背中を匠くんが軽く押した。

一
わ
づ
：。

その弾みで、私は自然に教室に入ることができ、クラスの雰囲気もだんだんとぎやかになった。

「ちよつ、美香、なんで匠くんと一緒にだったのー?」

机につくなり、私に質問をしてくる友達の小春に、私は、さあ？と首かしげをした。

「私もよくわかんない……。」

…… あの人、本当なんのつもりで私に構つてくるんだろ……。

やつぱりからかわれてる……？

…でも、皇先輩を好きってことがバレちゃつてる以上、協力してもらうしかないのかな…。

フーッと私が浅いため息をつくと、廊下側の窓がコンコンとたたかれた。

見てみると……、

「！！、
皇先輩！」

「おっはー、
桜木。」

「どういたんですか？わざわざ一年のクラスに…。」

先輩が入ってきたとたん、女子が一斉に振り向いた。

先輩、モテモテだからなあ…。

「ちよつと桜木に頼みごとがあつてさ…。」「は、はい、なんでしょう…。」

とその時、

「長谷川先輩。」

「、」の声は…。

私が振り向くと、やつぱり…。

そこには「ヤーヤしてこる匠くんがいた。

「あれ、君…。」

「1年の伊藤匠です。桜木になにか用ですか?」

「あ、もしかして、桜木の彼氏なの?」

「なつ、ち、違います! ただのクラスメイトです!」

先輩だけには誤解されたくない! 私は声が裏返つてゐることもせぬ気がかず、つい力説してしまった。

「あ、彼氏じゃないの?」

「全然違います! と、ところで頼みごとってなんですか?」

「あ、そうそう…。」

先輩が、ニッコリと私に笑いかけ、手をポンとたたいた。

「実はさあ、もうすぐ夏希が誕生日なんだ。」

「そうなんですか？」

「…なんだけど、オレ女子になにあげたらいいかわかんなくて…。
だから、桜木に聞こうかと…。」「夏希先輩、誕生日なんだ…。

少しだけ、胸がズキンと痛んだ。だけど…。

「私でよかつたら、協力しますから。」

私は笑顔をつくつた。

「本當か、桜木！やつた！」

…先輩の笑顔が見たいから…。

「じゃあ、なにから…。」「

「どうせなんだから、一緒に買い物行ってきたら？」

間で話を聞いていた匠くんが、私と先輩の顔を交互に見ながら、言った。
意地の悪そうな、ニッコリとした顔で。

「な、なにいつて…。」

「いいじゃん。一緒に言った方がわかりやすいし。どうですか、長

谷川先輩？」

「おう！ そうだな。一緒に行つた方がわかりやすいな！ 桜木、今日
放課後あいてる？」

「あ、はい！」

「じゃあ決まりだな！」

ええ…！

本当に…？

私と先輩が…！？

「テーートだな。」

耳元でそつとせせやかれた匠くんの言葉…。

まさかの、先輩とのテーートの
始まりです！！

「好きだから」なんて言えない・・・

（第5話）

放課後

ついに先輩とのデート…。

私はドキドキしながら、校門の前に立っていた。

…なんか、じつじて先輩を待つてると、一瞬だけ、彼女になつた
気分…。

「桜木！」

聞き慣れた声に私は我にかえり、顔を上げた。

「先輩！」

「遅れてごめんな。」

「いえ、私も今来たので、大丈夫です！」

先輩が優しく笑い、「そつか。」と呟く。

こんな少しのやりとりでも、私は嬉しくてたまらなかつた。

「よひしくな、桜木。じゃ、まづどこ行く？」

「そうですねー。夏希先輩つて、どういう物が好きなんですか？」

「んー、ストラップとかはよくつけてるけど…。」

「ストラップ…ですか。」

私はお気に入りの雑貨屋さんや、ショッピングモールを、先輩と回つた。

途中、人波にはぐれそうになつた私の手を、先輩が握りしめてくれて、顔が火照つてしまつた。

「うーん、中々、いいのないですね…。」

「そりだなー。」

そう言つうと先輩は、落ち込んだように深いため息をついた。

「先輩…？」

「…なんかショックだなつて…。オレ、夏希の好きなものも知らないとかダサすぎる…。夏希の彼氏なのにな…。」

「夏希の彼氏」

その言葉に、私は胸が、針で刺されたようにズキンと痛んだ。

皇先輩が、夏希先輩をすぐ大事に思つてゐることは、よくわかつてゐる。

私は、そういう、先輩の優しいところを好きになつたから…。

私は、手の平をギュッと握りしめた。

「…ダサくなんかないです。」

「…え…。」

「先輩は、すぐくすぐくすくじく、夏希先輩のことを考へてゐるじゃないですか。先輩は、人のことで一生懸命になれる人です。

…その一生懸命な先輩は、ダサくなんかないです。」

…初めて、先輩の目を真つ直ぐ見ることが出来た。

私は一体今、どんな顔をしていてどんな目をしているんだろう…。驚いて、目を丸くしている先輩の顔しか見えなかつた。

「…変なこと言つてすみません、先輩。行きましょうか。」

私が後ろを向いたその時、私の右腕が、がっしりとした、だけど優しい、先輩の手につかまれた。

私は、先輩の方を向かなかつた。

「…どうしたんですか？先輩。」「…桜木てさ、どうしていつも、オレのこと、そんな良く言つてくれんの…？オレ、そんなにヤツじやないよ。」

…先輩、それはね。

先輩のことが大好きだからだよ。

先輩の良いとこ、いっぱい、知つてるからだよ…。

だけど…、そんなこと言えない。

「好きだから」なんて、言えるわけがない…。

「…本当のこと、言つただけですよ…。」

…だけど…、

「好きだから」なんて言わないから。

この想いは、胸の奥深くに、閉まつておくから。

…せめて、これだけは
言わせてください…。

「私にとつて、先輩は…、
とても大切な人なんです…。」

無理やりに、笑顔を作る。

心配させたくないから。

…先輩は、私がそう言つた意味を聞かなかつた。

ただただ、見たことのないほど、真つ直ぐな瞳で。

私を見つめていた…。

結局、私と先輩は、恋人用のペアで売つてるハートのストラップを選んだ。

ストラップを買つときの、嬉しそうな先輩の顔を見て、初めて、先輩に恋したことを憎んだ。

…先輩を、好きになつてしまつた自分を憎んだ…。

デートの翌日の朝。

先輩から、

「昨日はありがとうございました。」って、メールが届いてた。

いつもは嬉しいはずの先輩からのメールも、今は…、

色あせていて、虚しかつた。

学校についた私は、なんとなく、匠くんがいる裏庭の方へ、向かってしました。

匠くんがいつもいる、ソメイヨシノの木…。

今は、冬の寒さで、枯れ葉になってしまっている。

なんとなく、私と似てる感じがした。

「…匠くん。」

私の声に、読んでいた本の上から、匠くんが顔を出した。

「桜木…。びっくりした。」

と、不意に涙が、ポロポロと頬を伝ってきた。

「え……、ちよ、桜木……。」

私が泣いている理由を知らない匠くんは、田の前で戸惑っていた。

「……匠くん、ごめん……。」

「え、いきなりなにが……。」

「……せつかく、匠くんが、先輩と一緒にデートさせてくれたのに……。私も、何も出来なかつた……。チャンスだつたのに……。しかも、先輩のこと困らせちゃつて……。」

……こんなこと、匠くんに言つてもしうがないつてわかつてゐる。

だけど、誰かに話さなきや、悲しさで、切なさで、苦しさで、心が破裂しそうだつた。

「桜木……。」

ごめんね、匠くん。

泣いたりして……。

匠くん、困るよね……。

そう思つた、涙が止まらなかつた。

「桜木……。大丈夫だ。」

そう言つて、匠くんは、しゃがみこんでいる私の頭を、優しく、撫でた。

とても、あたたかくて優しい、いつも匠くんからは想像できないほどの、安心感があつた。

「つ、ありがと、う、匠くん……。」

…夢に見た、先輩とのデート。

大好きな人とのデートするって、どんな感じだろうって、ずっと憧れてた。

だから、何度も、何度も、何度も、夏希先輩になりたいと思つた。

先輩に愛されてて、大切にされてて、ずっとそばにいられる夏希先輩が、悔しいくらいに、羨ましくて…。

だけど、もし私が夏希先輩だったとしても、皇先輩との恋愛なんて無理だったかもしれない…。

こんな、臆病で、自分の気持ちさえ伝えられない。

…臆病な私。

変わりたいよ…。

「…匠くん、どうやつたら変われるのかな…。もつ、こんな臆病で素直じゃない自分やだよ…。」

泣いて、もつにがなんだかわからなくなつて私の肩をつかみ、匠くんは真っ直ぐな目で、私を見た。

そして、優しい声で呟く。

「…無理して変わる必要は、ないだろ…。」

「…え?」

いつになく真剣な瞳に、吸い込まれてしまいそうで、少しだけ目をそらした。

「…誰だって恋愛で傷つきたくないから、どうしても臆病になる。桜木だけじゃないだろ。…それに、素直じゃなくても、桜木にはいっぱい良いところあんじゃん。」

いつもポーカーフェイスな匠くんが、顔を真っ赤にしている。

励まそうしてくれていることが、痛いほど、伝わってきた。

「…つまり言えないけど、オレは今ままの桜木が、一番いいと思うから…。だから、変わる必要なんて、ないだろ…。」

今私は、残酷すぎるくらいに優しい言葉だった。

胸の奥に、匠くんの言葉がジンと響き、私はブツコとなにかの糸が切れたよつこ、

…号泣してしまった。

頬を伝う、大粒の涙。

それは全部、匠くんのあたかくて優しい腕のなかに、吸い込まれていった。

…全部、匠くんが受けとめてくれた…。

（第7話）

12月。

風がすっかり冷たくなり、マフラーも耳当てをよく見かけるようになつたこの季節。

街は、すっかりクリスマスマードで、行く先々に、色鮮やかなイルミネーションがあつた。

私達の学校でも、おつきなクリスマスツリーが玄関に飾られ、クリスマスの計画をたてるカツプル達が、多くなつてきていた。

「桜木、帰るぞ。仕度しろ。」

「あ、今行く！」

…私と匠くんにも、変化が。

あの、私が匠くんの前で泣いてしまつた日から、帰りは必ず家まで送つてくれるようになった。

訳を聞いても、匠くんは

「なんとなく。」しか言わないので、その内聞かなくなつた。

「桜木、もう行けるか？」
「うん、平氣！」

私と匠くんが、教室を出ると、向いの方から、皇先輩が歩いてきた。

「おっ、桜木！」
私に気づいたのか、先輩が笑顔でかけよつてくれる。
「今、帰るところ？」
「あ、はい。」
「そつか、気をつけてな！」

先輩が走つていく。
私は、後ろを振り向かなかつた。

……先輩とは、少し気まづくなつた時もあつたけど、今は普通に喋つてゐる。

でもそれは、あくまでも、先輩の良い後輩として。

……私は、自分に境界線をひいた。

もう、先輩のことを好きにならない。

先輩のこととは、諦める。

元々、恋しちゃいけない相手だつたんだもん。

もつと早く、先輩を諦めるべきだつたんだ。

先輩には、あんなに素敵な彼女がいる。

好きになつたつて、ムダなだけ。

だから、諦める。

この恋を、終わりにするんだ…。

「よし、掃除終わりつと。」

私は裏庭の掃除を終え、校舎に戻りつとしていた。

と、向こうから見覚えのある姿が走つてくる。

「桜木さん!」

「え? … つて、夏希先輩!」

走つてきた夏希先輩は、私の前で止まり、息を整えた。

「よかつた。桜木さん、いて。」「どうしたんですか?」

「あのね、これ…。」

そつと、夏希先輩の白くて細いキレイな手から渡されたのは、英語の辞書だつた。

「これ、皇に借りてたんだけど、返すの忘れちゃつて。だけど私、これから委員会の集まりがあるの。だから…、悪いんだけど、桜木さん、これ皇に届けてくれない?」

「え、でも…。」

お願い!と言つ風に、夏希先輩が両手を合わせた。

…先輩と今はなるべく会いたくないんだけど、これじゃ断れないなあ…。

「…はい、わかりました。」

「え、本当！？ ありがとう… 皇、多分、資料室でサボつてると思つから。本当にありがとね！」

… 夏希先輩、可愛らしい笑顔…。皇先輩が好きになつちやうのも、わかる気がするなあ…。

私は夏希先輩と分かれた後、資料室へ向かつた。そして、ゆっくりと資料室のドアを開ける。

「失礼しまーす…。」

ドアを開けた瞬間、窓から入ってきた風が、前をかすめ、思わず田をつぶつた。

「わ、風が…。」

手で髪を押さえながら、田を開けると、そこには、窓に寄りかかって寝ている先輩がいた。

「先輩、寝ちやつてる…。」

私は、ゆっくりと先輩に近づき、そおつと辞書を置いた。

… なんか、こんなこと前にもあつたな…。

裏庭で寝てる先輩を起こさないようになつて…。

あの時は、先輩のことが大好きで、ただ先輩と話せるだけでも嬉しくて…。

私は、一度手をグッと握りしめて、ドアの方へ向かつた。その時だった。

「… 桜木…。」

風の音に消えてしまいそうな、かすかな声に、私は耳を疑つた。

先輩、今、なんて……？

「桜木……。」

本当に本当に小さな、かすかな先輩の寝言。でも私には、ハッキリと聞こえた。

……先輩、私の名前、呼んでるんですか……？

先輩が世界で一番大切な、夏希先輩じゃなくて……、

私を、呼んでるんですか ？

口を押された、私の両手に、涙がゅつぐつとこぼれてきた。

「（あれ……、変だな……。いつもの涙はしおっぱいのに、今の涙は、甘く感じる……。）」

……ああ、そうか。

涙が甘いのは、これが悲しい涙じゃなくて……、

嬉しい涙だからなんだ……。

私は、先輩の脇に、ぺたんと座りこんだ。

「先輩を諦めるなんて……、やつぱりできなによ……。」

ここ数週間、先輩のことを諦めようと必死に努力した。なるべく、近づかないうつむいて、話さないようになって……。

会つと、気持ちが溢れてしまうから……。

だけど、私はなんてバカだつたんだろう。

この気持ちを、この、先輩を「好き」って気持ちを、誰よりも大切にしてあげなきゃいけないのは、私だつたのに……。

…少し自分が傷ついたくらいで、恋に臆病になつて、自分から、この恋を捨てようとしたんだ……。

…まだ何もしてないのに? ?

私まだ、先輩に何も伝えられてないよ……。

好きつてことも、幸せになつてほしつてことも……。

私は、よつやく気がつくことができた。

いくら傷ついても、何かを失つても……。

私は、この恋を大切にしなきゃいけない。

最後まで、見届けなきゃいけない……。

例え、どんな結果になつても…。

…ようやく私は、恋の迷路から抜け出すことができた……。

かけがえのない宝物

（第8話）

「はあー、疲れたあ…。」

私は、四時間目の体育がやっと終わり、乱れた髪を直しながら、廊下を歩いていた。

ふと、窓の外を見ると、そこには何かを大声で叫んでる皇先輩が。

「（先輩、委員会の仕事かな？）」

私は、つい頬が緩んだ。

「…先輩、頑張って下さい…。」

小さな声で、先輩に呟く。

…なんか、不思議だな…。

先輩をやつぱり好きだつて気づいた田から、なんだかまわりがキラキラして見える…。

いつもの通学路も、教室も、ノートも、全部が輝いて見えるよ…。

私は久しぶりにスキップしながら教室へと向かった…。

「なあ、桜木つてさ、クリスマス会、出んの？」

帰り道。

私は匠くんと校門をくぐり、いつものように送つもらつていた。

「私は出るよー。だつて、1年に1回の楽しみだもん！」

クリスマス会とは、毎年クリスマスイブに学校で行われるパーティー的な行事で、この日だけは私服でもいいんだ！

なんだか昔、この学校の最初の卒業生だったカップルが、記念につて、作つたらしいんだけど…。

「匠くんは出るの？ 確か自由参加だつたよね？」

「オレは…。…桜木が行くなら行くよ。」

「え、なんで私？」

匠くんが、恥ずかしそうに、私から目をそらした。

「…だつて桜木、また泣くかもしれないだろ？…その時のためにだよ…。」

「…匠くん…。ありがとね。」

… 本当、匠くんは優しい。

一見、クールで無愛想に見えるけど、実は、困つてる人をほつとけないんだよね…。

「…てかそれより、長谷川先輩は来んの？」

「ああ、朝、部活で聞いたよ。先輩、来るんだつて。…夏希先輩と一緒に…。」

…私達の学校には、もう一つ、伝説がある。

それは、裏庭に毎年咲く、雪の結晶に似た、ラヴァーズフラワーの
という花を、好きな人にプレゼントすると、ずっと一緒にいられる
つていうもの…。

皇先輩は、多分その花を、夏希先輩にプレゼントするんだ…。

「…大丈夫か？桜木。」

匠くんが心配そうに、私の顔を覗きこむ。

私は、少し切なさが残っているような、笑顔を見せた。

「…大丈夫。もう、いくら傷ついても、先輩を好きでいるって、決
めたから…。」

今度こそは揺るがない。

揺るぎたくない。

そう、決めたから…。

私につられたのか、匠くんもかすかな笑顔を見せた。

「…ならいいけど。あんま、無理すんなよ…。」

匠くんの手が、私の頭をポンポンと撫でた。

「うん！ありがとうね（*^-^*）」

…本当に、ありがとう。

「はーっ、疲れたなあ…。」

家に帰り、私は真っ先に自分の部屋に向かった。
少し茶色がかかっているベージュ色のドアを開け、カバンをほおりなげ、ベッドに倒れこんだ。

フカフカしてて、きもちいいなあ…。

今日一日の疲れが、癒されていくようだつた。

「はー、クリスマス会、なに着ていこうつかなあ。」

先輩が好きそうな服…。

私はハツとした。

いけないーまた、先輩中心に考えちゃつてゐ…。

私はベッドにうつ伏せになつた。「…本当、先輩のこと、大好きだなあ…。」

先輩に彼女がいても、叶わない恋つてわかつても、なんかどうしても諦められないんだよね…。

多分それは…、

私の中で、先輩の存在がどんどん大きくなつてゐるから。

「やつぱり、先輩のこと諦めないでよかつたなあ。」

…先輩と初めて会った日のこと。
初めて話した日のこと。

初めて握ってくれた手の
温もり…。

初めて知った、胸の痛み…。

全部、全部、私の
かけがえのない宝物
。

…本当に、先輩を好きになつて
よかつたよ…。

黒猫のおまじない

（第9話）

「いつてきまーす！」

台所にいるお母さん達に声をかけ、私は玄関のドアを開けた。

「わ、寒い！」

冬の風の冷たさに、思わず巻いてあつたマフラーで顔をかくした。

今日は待ちに待つた、クリスマス会。年に1回の特別な日。

その時、軽いあぐびがでた。

「昨日、夜遅くまで服、選んでたからなあ…。」

ピンクと黒の、チョック柄のポンチョに、白いヒラヒラのニースカート。

頭には、ポンポンがついている白いベレー帽をかぶった。

この服、かわいいけど、寒いなあ…。

家のそばの角を曲がる途中、一匹の黒猫を見つけた。

「うわ～！かわいい！」

そういえば…。

黒猫を見つけたときに、好きな人の名前を10回唱つと、恋に進展があるんだっけ…。

私は、黒猫の右側にしゃがみこんだ。

「…長谷川…」

なんか、改めてフルネームで言つと、はずかしいな…。

だけど…。

私は大きく息を吸つた。

「…長谷川、皇…。」

この後、これを10回繰り返すのに、10分もかかつてしまつた。

「あー、美香、おはよー！」

私が教室に入ると、小春が可愛らしい明るい笑顔で、私のそばにきた。

「おはよ、小春…あれ？ その服って…。」

小春が自慢げに、服をポンポンとたたいた。

「へへー、わかる？」

「それ、人気ブランドのワンピでしょー？ かわいいねーー！」

「お父さんにねだつて、昨日ゲットしたんだー！」

えつへんーと言わんばかりの得意気な小春に、つい私も、顔がほころんだ。

「似合うよ、小春！」

「ありがと、美香こそ、気合いはいってんじやん！」

「…まあね…」

…小春は、私が先輩を好きだといつこと知らない。

… おひこね。 小春の好きなひとって、聞いたことないな…。

… わざいえば、小春の好きなひとって、聞いたことないな…。

私が小春と話していると、頭の上に、なにかノートのよつな物が置かれた。

ふりかえると…。

「おひす、桜木。」

「匠くん…おは…」

私は匠くんを見て、

す…、す…、す…、す…、す…、す…、

白いシャツに茶色のベスト。

すりつと脇に足に、デニムのジーンズがよく似合っていた。

すじ…。

結構ラフな服なのに、匠くんが着るとかっこよく見えるよ…！

「…どうかしたか？」

「あっ、いや、なんでもない…。ただ、かっこいいなあって…。」

私の言葉に、匠くんの頬が少し紅くなつた。

目をそらしている姿が、照れている証拠。

匠くんが、浅いため息をついた。

「お前はほんと…。」

「え? なに?」

「…いや、なんでもない。桜木こそ、似合つてんじやん。かわいい

よ。」

匠くんの言葉に、今度は私が赤くなってしまった。

匠くんって、いうごう事、サラツと言つちやつからなあ……。

気がつくと匠くんは、自分の席についていた。
私も、浅いため息をつく。

そんな私の様子を、小春が机に腕を着きながら、見上げていた。

「?どうしたの、小春。」

「…美香つてさ…。」

小春が少し遠慮がちに、私の耳でしゃべやいた。

「…匠くんのこと、好きなの?」 「…………えつ…!?

私は小春に言われたことを理解するのに、3秒かかった。
私が!? なんで?

困惑している私の様子を読みとったのか、小春が続けた。
「なんか、結構、噂になってるよ。匠くんと、美香のこと。ほら、
最近、帰りとか、いつも一緒にやん。」

そんな噂があつたの!?
全然、知らなかつた…。

こんな噂、もっと広まつたら、匠くんに迷惑かけちゃう…。

私は必死に訂正した。

「好きじやないよ! 全然!」

「…ほんとに?」

疑り深い目で見てくる小春から、目をそらさないよう必死に我慢し、
「ククク」とうなずいた。

「本当!好きじゃないよ!」

てか私の好きな人、先輩だし…。
私の熱意(?)が伝わったのか、小春がフムフムとうなずきながら、
立ち上がった。

「そうだよね…。初恋もまだな美香が、そんなわけないよね!」
「そ、そうだよ!アハハ。」

…「じめん、小春。

今、初恋真っ最中…。

心のなかで苦笑している私に、小春が、パン!と両手を合わせた。

「美香!お願い!」「
「へつ!?な、なに?」「
「実はね…。」

小春がまた耳元でさわやく。

「アタシ…、匠くんのこと好きなんだあ…。」

「へー。……つて、ええ!?」

私は驚きのあまり、大声をだしてしまった。クラスメイトが次々に
こっちを振り返る。

「え、な、ちょ、えつ!?」、「小春が…!?本当に!?」

「……うん……。」

小春、顔真っ赤…。
本当なんだ…。

「え、いつから…。」

「…前ね、部活でけがしちやつた時、匠くんが保健室まで連れてつ
てくれたんだ。…で、匠くんつて優しいんだなあつて…。」

「へーー！あの、匠くんが…。」

まあ、でも納得かな。匠くん、優しいから…。

「それでね、匠くんつて女子で喋るの、美香だけなの。だから…、
協力してほしいなあつて…。」

「もちろんだよ！協力する！」

「本当！？美香、ありがと！」

私は、まるで自分の事のように嬉しかった。

匠くんも小春も、一人とも私の大切な人だもん…。

両思いになつてくれたら、
嬉しいなあ…！

「小春、がんばって！」

私は、心からの笑顔でいった。

もうすぐ、クリスマス会が、始まりはじめていた…。

密かな恋

（第10話）

「それでは今から、クリスマス会の始まりです！」

放送委員の今岡に、一斉に生徒たちから歓声があがつた。

「どう行こうかなあ」

私は校舎に入らうとする人の波に流されないよう、隅っこの方に座つていた。

クリスマスツリー、きれい……。

クリスマス会は、6時から9時まで。各クラスがいろんな出し物をして、自由に回れるの――

なんか、文化祭みたい……。

そして、8時からは、全生徒の一一番の楽しみ・「聖夜の誓い」。いわゆる、告白タイム。

「聖夜の誓い」のために、男子も女子もラヴァーズフラワーを探し回つてゐるらしい。

「桜木！」

私を呼ぶ声に、人波の中をキヨロキヨロと見渡すと、

「あ、匠くん！」

匠くんが、人を押し分け、私に近づいてきた。

「すごい人だな。」

「本当！校舎、入れないね。」

とその時、遠くに皇先輩の姿を見つけた。

…夏希先輩に、会いに行くのかな…。

けど、先輩は、どんどん私の方に向かって歩いてくる。

「（え、え、なんで！？）」

私が硬直している間に、いつのまにか先輩が私の前にいた。

「よひ、桜木！」

「せ、先輩なんで…。ていうか、夏希先輩はどうしたんですか？」

「ああ、夏希。夏希はちょっと家の用事があるから、7時頃来るんだって。」

「あ、そりなんですか…。」

私は少しだけ、ホッとしてしまった。

夏希先輩、遅れて来るんだ…。

「だからさ、暇でも。ブラブラしてたら桜木がいたから…、来ちゃつた」

つ…、先輩その笑顔、反則…。

私は、頬が紅潮していくのを感じた。

そんな私の様子を読みとつたのか、匠くんが私と先輩の間に入ってきた。

「…じゃあ、長谷川先輩。暇なら7時まで、桜木と、回つてくれればいいじゃないですか。」

……え？

「ちよつ、匠くん！」

「いいじゃん。桜木だつて、暇でしょ。それに…。」

長谷川先輩と回りたいくせに と言ひ顔で、私を見ていた。

そりゃあ、一緒に回れたら夢みたいだけビ…。

「長谷川先輩、いいですか？」

「ああ、オレは別に、つてかぜひお願ひしたいんだけど…。もし、桜木が嫌じやなかつたら…。」

…先輩…。

私も、先輩と一緒に回りたいよ。すつゞく、回りたい…。

だけど、先輩には夏希先輩がいるし…。

もし尊とかになつちやつたら、先輩に迷惑かけちやう…。

私が迷つていて、匠くんが私を先輩の方に思つてきり押した。

「いたつ！ちよ、匠くん…。」

「いいから。余計なこと考えてないで行つてこいつて…本当に、行きたいんだろ？」

「つ…（／＼＼＼）。…あ、あの、先輩、私でよかつたら…。」

先輩の顔が輝く。

「おっしゃつ…じゃ行くぞ！」先輩が子供みたいに、私の手を引つ張つた。

「ちょつ、先輩…！」

私は早くも、ドキドキがMAXになり、顔が更に赤くなつた。

「いつてらつしゃい、桜木」

「もつひ、匠くんは…じゃあね、後で！」

私が手をふつたときには、もう匠くんが見えなかつた。

「…桜木のためには、これが一番いいんだよな…。っクソつ…匠が右足で地面を、思いつきりふんだ。

「行くな、桜木…。行くな…！」

この時の私は知らなかつた。

匠くんがあんなに私を想つていてくれたことを。

そして、匠くんを、知らない間に傷つけてしまつていたことを。

（第11話）

「桜木…どこ行く？」

私と先輩は校舎の中に入り、廊下を歩いていた。廊下には、呼び込みの生徒たちがいっぱい歩いてて、目がチカチカする…。

「私は、先輩の好きなとこでいいですよ。」

「そ？ オレさ、ちょっと行きたいとこあつてさー。ほら、コレ。」先輩が私に差し出したパンフレットには、いろんな出し物が並んでいて、先輩が料理クラブのとこを指さしていた。

「先輩、ここ…。」

「夏希の友達のとこなんだけど。なんか、クリスマスケーキ作つてんだつて！」

ケーキの名前に、先輩の顔がどんどん笑顔になる。先輩、ケーキ好きなんだ。かわいいな。

「じゃあ、そこ行きますか？」

「マジ！？ 行こ、行こ…あ。」先輩が、何かを思い出したようこ咳くと、私の右手を、ギュッと握った。

「せ、先輩…。」

「今日、クリスマスだし。今だけは、いいだろ？」

「…つそんな顔されたら、何も言えないよ…。」

なんか、前もこいつやつて、先輩とテートしたな…。」

あの時は、まあちょっと問題あつたけど、楽しかつた…。」

「？桜木？着いたよ。」

先輩の声に私はハツとした。

「あ、あ、あ、本当ですね…」

「行こ！」

席につき、しばらくして出てきたケーキは、上にサンタさんとトナカイが乗ってる、チョコレートケーキだった。

「わあ、おいしそう！」

フォークを持ち、ケーキの先っぽをすくい、口にいれた。とたんに、いちごの甘酸っぱさとチョコレートのどろけるような甘さが、口の中で絡み合い、私までとろけそうだった。

「おいしーい！」

「普ツ。」

そんな私の様子を見ていた先輩が、急に笑い出した。ヤバッ、テンション上がりすぎたかな…。

「……桜木……、かわいいな。」

「…え？」

先輩の、思いがけない不意打ちの言葉に、つい、フォークですくつ

たケーキを、お皿に落としてしまった。

「桜木、苺みたいに真っ赤」

「な、な…。だって、先輩がいきなり言つから！それに、私より夏希先輩の方が、全然かわいいですって！」

焦る私に、先輩は優しく笑い、私の頭をなでた。

「桜木はちゃんとかわいいよ。素直で、真っ直ぐで、優しくて。オレ、お前みたいなヤツ好き」

…先輩が、あんまりにも嬉しそうな顔で言つから、なにも言えなくなつた。

私はただただ、苺のようになんて…。

…先輩は本当、ズルい…。

彼女いくるくせに、他の子にも、そういうこと言つなんて…。

だけど…、

本当にズルいのは、今先輩と過ごしてゐるこの時を、最高に幸せだと思つてしまつてゐる私。

…先輩だつて、かつこひこですょ…」

「え、オレが？（笑）」

…先輩は、皆に優しくて、場の雰囲気とかも盛り上げてくれて…、すつごくキラキラしてます…。だから…、先輩は、羨ましくらいに、かつこひこです…！」

私の言葉に、先輩もどんどん真っ赤になつていて。

「つ…（／＼）（／＼） 桜木、誉めすぎだよ…。」

私は思わず笑ってしまった。

私達の姿は、周りから見たら、かなりヘンテコな図。

だけど、私は、楽しくて嬉しくて、幸せだった。

その後も、先輩と天体部のプラネタリウムを見たり、屋上のバルーンアートを見たり…、

楽しい時間はあっという間に、過ぎていった。

「まもなく七時になります。告白タイムまで、後、一時間でーす！」

スピーカーから流れる放送が、冬の屋上に響いた。

「もう、こんな時間…。」

…先輩と、もっと一緒にいたかったな…。
だけど…。

私はわざと明るく切り出した。

「もう7時ですねー! も、先輩、下に…。」

その時だった。

ドアに向かおうとした私の右腕を、先輩がつかんだ。
強く、強く…。

「せ、せんぱ…。」

「…桜木、8時まで、一緒にいなか…?」

「えつ……でも、夏希先輩……」「夏希はいつも一緒にいるし……てか、オレが、桜木とまだ一緒にいたいんだ。……ダメか?」

ドキン……。

先輩、私と一緒にいたいって、思つてくれてるの……?

夏希先輩よりも、私のことを優先してくれるの……?

私も、先輩と、もつと一緒にいたい……。

「聖夜の誓い」だって、本当は行つてほしくないよ……。

だけど……。

「……ダメです。」

「……え?」

「先輩は、夏希先輩のとこに行つてあげなきゃダメです……」

先輩に、迷惑はかけないって決めたから……。

「夏希先輩と約束したんだじょ? きっと、夏希先輩、楽しみにします……! そんな大事な人との約束を、クリスマスを……台無しにしちゃダメです……!」

私は、自分の幸せよりも、先輩の幸せを願いたい。
誰よりも、先輩の幸せを……。

私は、右腕をつかんでいる先輩の手を離した。

「……先輩、行つてください。」

先輩から、一步遠のく。

先輩、早く行つて…。

じゃなきや、引き留めたくないっちゃうから…。

「桜木……。桜木は、本当に優しいな…。…そつだよな、約束破るのはダメだよな…。オレ、行つてくるー」

そう言つて、ドアへと走つていいく先輩。私が振り向いたときには、もう先輩の姿はなく、屋上には私一人しかいなかつた。

「先輩…。これで、よかつたんだよね…。」

先輩が、夏希先輩のとこ行つて、「聖夜の誓い」で告白して、一人が幸せで…。

これが、一番いいんだ…。

その時、屋上のドアが開いた。私が振り向くと…、

「…やつぱり、泣いてる…。」

「匠くん…。」

汗だくで、息を切らしている、匠くんがいた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4291z/>

「先輩、あのね。～tearlove～」

2011年12月31日23時45分発行